

# 依頼表現のプロトタイプと語用論的な制約

楊 慧 芳

## 一. はじめに

依頼表現にかかわる動詞には「願う」、「頼む」、「求める」、「依頼する」、「要請する」、「要求する」、「懇願する」、「哀願する」などがある<sup>1</sup>（以下「依頼動詞」と呼ぶ）が、日常生活での依頼においては、「願う」、「頼む」以外の依頼動詞はあまり使われない<sup>2</sup>が、授受動詞の補助動詞、希望の助動詞などによって組み合わせた形式が多く見られる。様々な依頼の形式があるので、主としてモダリティを中心とした構文論から語用論に至るまですぐれた論文が多く見られる。しかし、

### (1) 「ねえ、お願いがあるんだ」

「お願い？」

「ねえ、トッチを帰してやってよ。まだ赤んぼうだもの、かわいそうだよ。あの子は自分の名前だってまだちゃんと言えないんだ。だれに誘拐されたか、どこに閉じこめられていたか、そんなこと話せやしないよ。僕はここに来ることをだれにも言って来なかったしさ。だからさ。頼むよ。トッチだけは帰してやってよ」

「しかし、こっちは金があるんだ。お前のおやじが笹塚のおやじと同じくらい金を払えるやつかどうかだ」（三日228）

男の子→誘拐犯（若い男性）<sup>3</sup>

### (2) 「それで、僕の推定が合っているかどうか、調べてみたいのだ。一つ協力して欲しいが」

太市がいうと、新六はうなずいた。

「ええとも。是非やらせてくれ。わしの方が手が空いている」

「有難う」と太市は礼をいった。

「それじゃ、君は十日の夜、あの岸壁の沖にいた貨物船と汽船は何処

の船で、誰にチャーターされたか調べてくれ。汽船といっても、小さなランチ程度だ」

「オーケー。そんなことは訳が無い。どうせ近所の船だろうから、この市の汽船会社を調べれば、訳は無い。もう無いか？」

「では、もう一つ頼む。山下がああ晩、南課長と料理屋でめしを食べているな。たしか山下の送別会だった。そのとき、宴会は何時に済んだか。それはその時刻に済む予定だったか。南課長はどの程度に酔っていたか。それも調べて貰いたいな」

「わかった。あの宴会のあった料理屋なら、わしも知っているから易くいつてくれるだろう」

「じゃ、たのみます。僕は別な方面を調べてみるから」

二人は一しょに陽道新報社を出て別れた。(張込み367-368)

#### **男性社員→先輩**

のように、(1)の下線部に依頼の形式が3つあり、ひとまとまりの依頼表現を完成したのに対して、(2)の下線部に依頼の形式が5つで、まとまった依頼表現を2つ完成している。それぞれの依頼の形式には何か関連があるのか。また、「お願いがあるんだ」や「一つ協力してほしいが」、「頼む(よ)」は依頼の形式に属するが、他の説明や依頼の形式と共起しなければ単独で1つの依頼表現を完成できない傾向が見られる。そして、「頼む」は「もう一つ頼む」と機能が違う。このように、単独に使うか、他の語句と共起するもとで使うか、或いは副詞、終助詞との共起や依頼表現における配置の相違によることを「語用論的な制約」と呼ぶことにする。そこで、語用論的な制約を徹底的に考察するためには、再び依頼表現のプロトタイプを検討する必要があると考えられる。

## 二. 先行研究

従来の研究では依頼、命令といった区別以外、直接、間接という用語を使っている。例えば、上野(1983)は動詞の命令形と「～なさい」「お～なさい」「お～ください」を命令のかたちに、「～てくれ」「～ないでくれ」「～てくだ

さい」「～ないでください」「～てくださいますか」「～てくださいませんか」「～ていただけますか」「～ていただけませんか」を依頼のかたちに、間接的に命令や依頼を表す疑問文や平叙文を間接的な命令・依頼のかたちに分けている<sup>4</sup>。上野のあげた例を見ると、「どうぞ、手をお上げください」を命令のかたちにしているが、「窓を開けてください」を依頼のかたちに見なしている。しかし、「お～ください」は「どうぞ」との共起によって相手に命令する意味が薄くなり、要請の意味が増えるようになるのではないかと考えられる。小泉（1990：262）は、「どうぞ」が「依頼文か、可能に関する疑問文かを識別するテストとして役立つことになる」と指摘していることに注意されたい。

それに対して、益岡・田窪（1989）は動詞命令形、「～なさい」を除き、依頼の形式を直接依頼形式と間接依頼形式に分けている<sup>5</sup>。直接依頼形式には、「～て、～てくれ、～て下さい、～てちょうだい」のように「動詞のテ形＋『くれる』の命令形」などを使うもの、「～てくれるか、～てくれないか、～てくれませんか、～てもらえるか、～てもらえますか、～てもらえませんか」のように、相手が自分の頼みに応じる意志があるかどうかを尋ねるものが含まれ、間接依頼形式には、「～てほしい、～てもらいたい、～てほしいんだけど」のように、相手の動作を自分が望んでいることを知らせるもの、「～てくれると助かる、～てくれるといいんだが、～てくれるとありがたいんだけど」のように、それが自分にとって有益であることを相手に知らせることで、相手はその動作をしてくれるように仕向けるものが含まれている。

上野、益岡・田窪の分類は、話し手が聞き手に依頼の表出をするか意志の段階に止まるかに基づいている。他方、小泉（1990）は英語と対照して「I order / request you to open the window.（私はあなたに、窓を開けるように、命じる／お願いする）」を直接の〈命令もしくは依頼〉にし、日本語の依頼の間接発話行為としては、

- ①窓を開けて下さい。
- ②窓を開けてくださいませんか。

③窓を開けていただきたい。

④窓を開けていただければありがたい (のですが)。

のように、授受動詞「くれる」、「もらう」の敬語体「下さる」、「いただく」を含むのが普通であり、丁寧さがこうした間接的表現を派生させる根源だと指摘している<sup>6</sup>。要するに、小泉は依頼動詞があるかどうかを直接形式と間接形式との区別基準にしている。しかし、こうして直接、間接による分類法は、(1)(2)の依頼の形式の配置による語用論的な制約に関する構造が説明できないと考えられる。

### 三. 依頼文の分類

百冊以上の現代小説の会話文から依頼表現にかかわる用例をまとめて、それぞれの機能や形式を考え、用法の近い依頼の形式をグループに分け、依頼文を5つに分類する。最もよく使われる依頼の形式から検討していく。

(3) 面会室まで、彼女は係員に誘導された。

「面会時間は五分間です。どうぞ、そのおつもりで、大事な話から先に話してください」

その注意に、頼子は黙ってうなずいた。(波-下332-333)

**拘置所の面会室の係員→女性**

(4) 小野木は、先輩検事の机の前に立った。

「やあ、ひどい目にあつたらしいな。まあそこに腰かけてくれ」

小野木は、まっすぐに立った。

「おそくなりました。汽車が不通だったので、今、やっと帰ってまいりました」(波-上236)

**男性検事→後輩(若い男性)**

(5) 「じゃあ今度、サイン本を何冊かあげるね。みんなで分けて」

「はあ、どっちでもいいですけどお」

そういうときは、お世辞でもいいから「ありがとうございます」って言うものだろう。(空中252-253)

**女性患者→看護婦**

- (6) 「ユミちゃん、ユミちゃん、勝木のおばちゃんだよ、開けてちょうだい」  
窓をほとほと叩く音と、呼びかける声を聞いたときには、眠れないままにぼんやりとしていた頭がいつぺんに冴えて、由美子は階下まで文字通り飛んで行った。戸を開けて、宏枝がフード付けのコートにすっぽりと身を包み、寒そうに立っているのを見つけて、ああ本当に間違いないと勝木のおばさんだと判ると、とたんに泣けてきてしまった。(模倣-下227)

**五十代の女性→幼なじみの娘**

- (7) 「新聞社の者ですが」  
「どこの？」  
「陽道新報です」  
太市は仕方なしにいった。昔は、大新聞の名を胸を張っていったものだ。  
「陽道新報だと？そうか、じゃ、お待ち」  
老人は二階の障子をしめた。かれは戸口から現れた。(張込み369)

**老人→新聞記者(三十代の男性)**

- (8) 「おかあさんには断って来たの？」とお祖母ちゃん。  
「ううん」と二人でかぶりを振る。  
「じゃあいいのよ、それでも、これからも内緒でいらっしやい」(サウス-上218)

**お祖母ちゃん→孫たち**

- (3) は授受動詞の補助動詞の命令形「してください」によって、拘置所の面会室の係員である話し手が自分の職務から相手に気をつけるべきことを伝えている。(4) は「してくれ」によって部下に座るようにと勧めている。「座る」ということは誰が利益を得るか定まらない<sup>7</sup>。そこで、受益者があっても、依頼表現を実行した効果で、依頼表現を決める条件ではないことが分かる。(5) は「して」の例で、話し手が自分の本を相手に頼んでほかの人に分けてほしいという内容、(6) は「してちょうだい」の例で、親しい近所の娘

にドアを開けてほしいという内容である。また、(4)の「してくれ」は男性向きで、(5)の「して」、(6)の「してちょうだい」は女性向きという性別上の不均整な性質<sup>8</sup>が示されている。(7)の「お待ち」は「お+<連用形>」の例で、話し手は相手が待ってくれるはずだと思っている。(8)の「いらっしやい」は「来る」の尊敬語の命令形の例で、お婆さんが孫たちに歓迎の意を表している。これらを「命令的依頼文」と呼ぶことにする。

命令的依頼文には、話し手が自分の職務、権利、身分などによる「なわばり意識<sup>9</sup>」から目下や対等な人に対して使う傾向が見られる。「助けてください」「助けて」「助けてくれ」「助けてちょうだい」などの依頼の用法も見られる。しかしながら、「相手を助ける」のは話し手のなわばりに属さない。こういう場合、話し手の強い「依頼性<sup>10</sup>」を強調することが感じられる。しかし、命令的依頼文において、話し手は命令文の話し手と違い、必ずしも「聴者に対する行為遂行の強制<sup>11</sup>」という権利を持たない。にもかかわらず、聞き手に応答の余地があまり与えられないことから見ると、命令に近い感じがするであろう。

次に、「してくれる(か)?」「してくれない(か)?」「してもらえる(か)?」「してもらえない(か)?」の例である。

(9) そのとき、ドアにノックの音がした。

「お兄ちゃん、新聞屋さんが集金にきたの。出てくれる?」

僕は舌打ちした。叔父さんは暗がりから小声で「行ってやれよ……懐中電灯でしるしを見つければいいんだから、簡単さ」

僕はうなずいて部屋を出た。妹に見えないように素早くドアを閉め、「へんだな。いつもは日曜日に集金にくるはずじゃないか」(隣人37)

**女の子→兄**

(10) ゴム引きのレインコートを着た警官が人だかりを整理しているのが見えた。村野は人込みを掻き分けて前に進んだ。

「何か起きたのか教えてくれないか。俺は『週刊ダンロン』の記者だ」「おや」と警官は眉を上げて村野を見た。「『ダンロン』の記者さんが刺されたんですよ」(灰361)

週刊誌の男性記者→警官

- (11) 「……会社には連絡しないって、約束してもらえますか？」  
「ええ、約束します」(サウス-上200)

男性探偵→訪問先の若い男性

- (12) 「本当に、そんないいですから。あたしがびっくりさせてしまうたから、いかんかったんです。すみません」  
「でも、買っていただいた分はお返しいたしますから」  
「いいんです。そのかわり、と言うてはなんですけど、あとでお買物に付き合ってもらえませんか。ベビー用品で、どんな揃えておかんならんのか、ようわからへんし」  
「わかりました。この子がミルク飲み終わったら、一緒に見にいきましょ」(盗り242)

若い女性→初対面の若い主婦

(9) (10) は聞き手の視点からの依頼で、(11) (12) は話し手の視点からの依頼である。他には、尊敬語「してくださる(か)」、「してくださらない(か)？」と謙譲語「していただける(か)」、「していただけない(か)？」の例もある。これらを「疑問的依頼文<sup>12)</sup>」と呼ぶことにする。ここでは用例を省略させてもらう。それから、

- (13) 「たまには会いたいイ」電話で鼻声を出したら、尻尾を振って駆けつけてきた。  
「うれしいよなあ。広美がおれのこと、誘ってくれるなんて」  
愚か者め。何も知らないで。(プール158)

若い女性→親しいカメラマン(男性)

- (14) 「どこで誰と会うのかだけ、教えてほしい。心の準備が必要やから」  
「そんなものは必要ないんやけどな」(白夜142)

中学校男子生徒→クラスメート

- (15) 「越智君。坊城の町から引きあげてくれ。今夜は福岡市内にでも泊って、明日は針江に行くのだ」  
「はあ」

「針江にいる下坂の細君の叔母夫婦に会ってね、結婚してから下坂が叔母の家に来たかどうかを聞いてもらいたい。その叔母のつれあいはどういう仕事をしているのか？ 漁業か、それとも農業か」（場面226）

**警官→他署の警官（下位者）**

- (16) 「裁判長！ 只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから、取消しを願います、また被告を法廷において非難するような発言は好ましくありません！ 裁判長からご注意を願いたい」（巨塔3-186）

**弁護士→裁判長**

- (17) 「おたずね致します。峠さまとお待合わせの方、いらっしやいましたら、カウンターまでお越しを願います」

呼び出しの放送は、二回繰返して行なわれた。（影374）

**呼び出しの放送（女性）**

- (18) 「僕も飛入りの仲間入りをさせていただきたいのです。新郎新婦、寛容を御許可をおねがいします。御媒酌、御両親がた、司会の方、それに来賓の方々、どうぞお許し下さい。もとより御許しがなければ失礼をお詫して引きさがります、いかがでしょう？」（おと186）

**男性→披露宴の客**

- (19) 「串田医師に、家族はいないのですか？」

「広島にご両親と、弟さんが居られますが、そちらにも、何の連絡もないそうです。今までお話したことは、くれぐれも、内密にお願いしたいのですが」

「わかっています」（誘拐160）

**病院の事務長→探偵**

- (20) 「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから、さっき云った分担で留守中の管理を頼みたい、万一、事故が起きた場合は、はっきり責任を取って貰うから、そのつもりで頼む、いいかね」（巨塔2-353-354）

**教授→医局員**

- (21) そこへ、高野を欠き、現在は書籍コーナーの事実上のチーフになって



いる女史がやって来た。

「ごくろうさま。交代するからお昼にしてね。午後からは倉庫で検品をお願い」

「阿弥陀様、お助けを」を、佐藤が言った。(魔術234)

#### **女性→職場の男性部下**

(13)～(21)は話し手の視点に立って、聞き手は話し手が希望を述べることからその依頼意図を推測することにより、依頼表現を完成するので、相手に対する依頼性が命令的依頼文より弱く感じられる。これを「要望的依頼文」と呼ぶことにする。

(22)「その電話がかかったと称するころ、丹野氏はすでに殺されていたのか」

「そうだったと思います……」

「君たちの犯行計画を、もう一度、できるだけ詳しく話してもらおう」

「はい……」ユリ枝はもう淡々とした口調になっていた。(蒸発330)

#### **刑事→女性犯人**

(23)「これを分解したり複合したりして調子を整えました。うまくいったかどうか、一つ聞いていただけますでしょうか」

和賀はテープをまわした。

一種異様な音が出はじめた。(砂-下49)

#### **男性→婚約者**

(22)の「できるだけ詳しく話してもらおう」は「できるだけ詳しく話してください」、(23)の「一つ聞いていただけますでしょうか」は「一つ聞かせてください」に解釈してもいいのである。このように、聞き手は話し手の意志表出からその依頼意図を推測し、依頼表現を完成する依頼文を「意志的依頼文」と呼ぶことにする。

こうして命令的依頼文、疑問的依頼文、要望的依頼文、意志的依頼文は、すべて話し手が自ら聞き手に持ち出した依頼の形式である。視点から考察すれば、聞き手に近づく視点(以下「聞き手指向」と呼ぶ)と話し手に近づく視点(以下「話し手指向」と呼ぶ)に分けられ、下記の通りである。

(24)

主語の指向性	依頼文の種類
聞き手指向	◆命令的依頼文：してください、してくれ、して、してちょうだい、お+<連用形>、尊敬語の命令形など ◆疑問的依頼文：してくれる(か)、してくれない(か)、してくださる(か)、してくださらない(か)など
話し手指向	◆疑問的依頼文：してもらえる(か)、してもらえない(か)、していただける(か)、していただけない(か)など ◆要望的依頼文：したい、してほしい、してもらいたい、していただきたい、～願いたい、お(ご)～願う、お願いする、お願いしたい、頼みたい、お願い など ◆意志的依頼文：してもらおう(か)、いていただこう(か)など

#### 四. 依頼表現のプロトタイプ

Lakoff (1987, 日本語訳1993) は人が理想認知モデル (idealized cognitive model, 略してICM) を用いて知識を組織化して、カテゴリーの構造ならびにプロトタイプ効果はそうした組織化から生じる副産物だ<sup>13</sup>と考えている。更に、怒りに関するプロトタイプ的なICMを論じる時、「このモデルは時間の次元を持ち、幾つかの段階を内に含んだシナリオとして考えることができる<sup>14</sup>」ということ述べている。Lakoffの理論を参考して、依頼表現のプロトタイプ的なシナリオを提案してみる。

(25)

- a. 話し手が何か不足を感じている。
- b. 話し手はその不足を聞き手の力によって解決できると思っている。
- c. 話し手はその思いを聞き手に話し、聞き手の協力をほしがる気持を述べる。
- d. 話し手は聞き手の協力を要請する。

(25a) (25b) は話し手の思考の中に隠されて言葉に表出されないことである。Searle (1969, 日本語版1986) は依頼 (request) について事前規則

(「1. H<sup>15</sup>はAをする能力を持つ。SはHがAをする能力を持つと信じる。2. SとHの両者にとって、通常の事態の進行においてHがAをすることは自明ではない)と誠実性規則(「Sは、HがAをすることを欲する」)を述べているが、話し手が聞き手にある事柄をしてほしい原因を言及しない。しかし、日本語の依頼表現を考察する場合、(25a)の「話し手が何か不足を感じている」は正に話し手が希望を持ち出したり、要請を表したりする動機ではないか、と考えられる。「不足を感じている」ことこそ、話し手が様々な依頼形式を思案し、最も適切なストラテジーを使用しようとする出発点だと言える。(25b)も必要で、これはSearle(前掲)の「事前規則」にあたる以外、Lakoffの「語用論的前提」<sup>16</sup>にも相当するのである。また、命令的依頼文と疑問的依頼文に関する例は(25d)からの実現だとすれば、意志的依頼文と要望的依頼文に関する例は(25c)からの実現であろう。手元の用例によると、(25d)による例は(25c)による例より多いことが示されている。

前に述べたのは、それぞれ1つの依頼の形式だけでひとまとまりの依頼表現を完成する例である。しかし、1つの依頼の形式でひとまとまりの依頼表現は完成できない場合もある。例えば、話し手が聞き手とソトの関係にはあり、相手にとって依頼行為による負担が大きいなどの依頼しにくい場合である。すると、例(1)(2)のように依頼の「表出」以外、依頼の「切り出し」「締めくくり」も必要になる。依頼の切り出しと締めくくりは、殆ど依頼動詞・名詞(頼む・頼み、願う・願います・お願い)、助動詞(たい)によって組み合わせた形である。単独に使われる場合もあるが、通常「よろしくお願ひします」「よろしく頼みます」のような慣用的な用法<sup>17</sup>である。依頼表現の場合、大体他の説明や依頼の形式と共に、ひとまとまりの依頼表現を完成するのである。まず、依頼の切り出しの例を見てみよう。

(26) 「あなたが呼んでください。それと和泉さん、一つお願いがあります」  
「うむ？」

「彼を、両親の目の前で手錠をかけてしょっぴくことだけは、して欲しくないのです」(猫282)

**記者→刑事**

(27) 「そうですか。そこで降居さんに折入ってお願いしたいことがあるのですが」

「何でしょうか」(獲物46-47)

十億円チャリティの元締め(年寄りの男性) → 心理学者のキャスター

(28) 「千織、一つ頼みがある——弾いてほしい曲があるんだ」こくん、と千織が頷いた。

「僕の代わりに、真理子の——お姉ちゃんのために」(四日478)

保護者(男性) → 少女

(29) 「そうだろうな。ところで、君に頼みたいことがあるんだ。いいかな」

「もちろんです。僕は村野さんの命令なら何でもやりますから」

「社外の仕事だからこっそりやってくれ。これだ」と村野は葬式の日  
に弓削からもらった封筒を出した。小林はそれを読んで驚いたように  
顔を上げた。

「このことは誰も搦んでませんね。あれだけ警察やマスコミが動いた  
のにどうしてだろう」(灰408)

週刊誌の男性記者 → 男性後輩

(26) の「お願いがあります」、(27) の「お願いしたいことがあるのですが」、  
(28) の「頼みがある」、(29) の「頼みたいことがあるのだ」などの用法が  
多い。相手に依頼したいことを具体的に言っていないので、依頼内容の「予告」  
の機能があると考えられる。そして、(26) (28) は事実叙述の形であるが、  
(27) (29) は「のだ」と共に使われて理由説明の形になる。そこで、この「予  
告」の機能を(25)の依頼表現のプロトタイプ的なシナリオに加えると、  
(30)

- a. 話し手が何か不足を感じている。
- b. 話し手はその不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。
- c. 話し手はその不足が聞き手に対する負担を考慮して、先に依頼を切り出した方がいいと思っている。
- d. 話し手はその思いを聞き手に話し、聞き手の協力をほしがめる気持を述べる。

e. 話し手は聞き手の協力を要請する。

のように、下線部の(30c)が新しく増えた部分で、依頼の切り出しを示す。次は、依頼の締めくくりで、依頼の意味を強調したり、まとめたりする効果がある。

(31) 「先生、少しでもお話をさせて下さい——。絹江さんが戻る前には帰ります」

鶉飼は、小さな瞳を開き、眼鏡を外し、忌ま忌ましそうに柘植を見据えた。

「何が言いたい？」

「十分だけお話を——。お願いします」

「……」

「先生——」

「上がれ」

柘植は深々と頭を下げ、鶉飼の背を追ってリビングルームに入った。

(陰231)

**警官→議員 (男性)**

(32) 姉が間に割って入った。青ざめた顔でバッグを取り返そうとした。

「川谷さん、お願いします」

「離せ。おまえらにわたしの気持ちがあわかってたまるか」(最悪590)

**女性→中年の男性**

(33) 山本は震える手で通帳を突き出した。印鑑が足元に転げ落ちた。

「頼む。これは持っていてくれないか」

「……」

「頼む——頼むから……」

宙をキッと睨み、小さな溜め息を漏らして静江は通帳に手を伸ばした。

(動機183-184)

**女性→元の夫**

(34) 「先生、頼みます。一緒に行ってください」誠司は身を乗り出していた。

「一切口を利かず、隣に座っているだけでいいです」

「えー。マジで？」

「どうか、頼みます」深々と頭を下げた。

争いごとは、結局のところ頭数だ。数的優位に立つ方が勝つ。二人でどうにかなるものではなくとも、一人よりはmalıdır。おまけに伊良部は巨体だ。(空中105)

**やくざ** (患者) → 男性医者

(31)の「お願いします」、(32)の「お願いします」、(33)の「頼む」、「頼むから」、(34)の「頼みます」は依頼しにくい場合によく使われ、話し手の強い要望を強調したり、依頼表現を締めくくる機能がある。そして、(30)の依頼表現のプロトタイプ的なシナリオに増やすと、下記の通りである。

(35)

- a. 話し手が何か不足を感じている。
- b. 話し手はその不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。
- c. 話し手はその不足が聞き手に対する負担を考慮して、先に依頼を切り出した方がいいと思っている。
- d. 話し手はその思いを聞き手に話し、聞き手の協力をほしがると述べる。
- e. 話し手は聞き手の協力を要請する。
- f. 聞き手がすぐその要請を受諾しない場合、話し手は再三聞き手にねだる。

下線部の(35f)が新しく増えた部分である。すると、(35)は(25)(30)よりストラテジーが多く、シナリオも長くなる。(25)は用例の数が最も多いということから基本的な依頼表現とすれば、(30)と(35)は依頼しにくい場合しかその役割を働かないと考えられる。しかも依頼の切り出しは必ずしも依頼の締めくくりと同時に使われない。個人差や場面によって、それぞれ単独で様々な依頼の表出と組み合わせている。

以上、依頼形式の「切り出し」「表出」「締めくくり」の機能を簡単にまとめた。表にすれば下記の通りである。

(36)

依頼の ストラテジー	依頼表現の プロトタイプ	依頼の形式	主語の指向性
話し手の 考え	話し手が何か不足を感じている。	/	/
	話し手はその不足を聞き手の力によって解決できると思っている。		
依頼の切り出し	話し手はその不足が聞き手に対する負担を考慮して、先に依頼を切り出した方がいいと思っている。	◆要望的依頼文：お願いしたいことがある、頼みたいことがある、頼みがある など	◆要望的依頼文→話し手指向
依頼の表出	話し手はその思いを聞き手に話し、聞き手の協力をほしがる気持を述べる。	◆要望的依頼文：したい、してほしい、してもらいたい、していただきたい、～願いたい、お～願う、お願いする、お願いしたい、頼みたい、お願い など ◆意志的依頼文：してもらおう(か)、していただく(か) など	◆要望的依頼文→話し手指向 ◆意志的依頼文→話し手指向
	話し手は聞き手の協力を要請する。	◆命令的依頼文：してください、してくれ、して、してちょうだい、お＋く連用形、尊敬語の命令形など ◆疑問的依頼文：してくれる(か)、してくれない(か)、してくださる(か)、してくださらない(か)、してくださらない(か)、してもらえる(か)、してもらえない(か)、していただける(か)、していただけない(か) など	◆命令的依頼文→聞き手指向 ◆疑問的依頼文：してくれる(か)、してくれない(か)、してくださる(か)、してくださらない(か) →聞き手指向/してもらえる(か)、してもらえない(か)、していただける(か)、していただけない(か) →話し手指向
依頼の締めくくり	聞き手がすぐその要請を受諾しない場合、話し手は再三聞き手にねだる。	◆要望的依頼文：お願いする、お願い、頼む など	◆要望的依頼文→話し手指向

注：依頼文以外の疑問文や平叙文を用いて推意を通し、聞き手に依頼の意味を察してもらおう、という婉曲的依頼文もあるが、依頼表現における位置が定まらない。

## 五. 語用論的な制約

依頼表現のプロトタイプ的なシナリオが分かると、依頼の諸形式の機能について段階的に分析ができると考えられる。ここでは、いくつか、話し手指向か聞き手指向という主語の指向性や依頼文の配置から形成された語用論的な制約を検討したい。まず、依頼表現における中核としての依頼の表出に関する例を見る。(37)は依頼の形式を2つ用いてひとまとまりの依頼の表出を完成している。勧めの場合、疑問的依頼文を用いてから、命令的疑問文を用いると、聞き手に対する丁寧さが感じられる。「ぜひ」などの副詞と共にすれば、丁寧さが更に増えてくる。

(37) 「うちに遊びに来ていただけませんか。今、住んでいるのは前山寺の近くだねです」太一はメモ帳を取り出し、地図を書き始めた。「むさ苦しいところですが、是非寄って下さい」  
「寄らせてもらうよ。だが、今夜は無理だよ。」

「じゃ明日、お待ちしております」(愛18)

**年輩の男性→元若旦那**

のように、最初「していただけませんか」を用いて相手の意向を尋ねて、後で依頼性の強い「してください」を用いて話し手の懇意をアピールしている。これはLeech (1983, 日本語訳1987: 190) の説かれた気配りの原則「他者に対する利益を最大限にせよ」に関わるのであろう。逆に、

(38) 「もしもし」送受器を耳につけた。

「ああ、奥さん」やはり紛れない川井の声。

「すぐ来てください。ご主人が急病です。なに、ご心配はいりません。盲腸かもしれない。手術は簡単なのです。来てくださいますか?」

「参ります、もしもし、場所は？」(張込み129)

**男性→同僚の妻**

の如き、命令的依頼文(「してください」)を先に、疑問的依頼文(「来てくださいますか」)を後にすれば、聞き手に対する話し手の不確定さを表すようになる。こうして後ろの依頼文には、文脈的に前の依頼文の依頼性を変更する機能が含まれると考えられる。そこで、話し手の意図が強くなった



り、弱くなったりするような感じがするであろう。Grice (1989, 日本語訳 1998: 243) は、「問題の含意は明言的に取り消し可能」「文脈的に取り消し可能」と指摘しているが、依頼表現においては、後ろの依頼文が前の依頼文を「取り消す」のではなくて「依頼性の度合いを変更する」と考えられる。

次に、(39) (40) は「してもらいたい」と「しておくれ」によって話し手(年配の女性)が聞き手に対する強い意志が感じられる。

(39) 「入費はいくらかかっても構わんから毎日宮城野の方へ行って山住さんとその女の張番をしていて進退ならない証拠を見付けてもらいたい、きっと見付けておくれ、向うで何と言訳しても直ぐに取って押えられるような確な証拠を見付けておくれ、実はこの子も外から好い口が出て来て山住さんへ遣っておくより其方へ遣った方が当人の仕合せだけれども自分の我儘で山住家を出るようになるとこの子の為めにならん、山住さんが外の女を拵えてこの子を追出したという証拠が拳がれば何処へ遣るにもこの子の明りが立つ、和女がその証拠を見付けたら直ぐにその廉を以て山住さんに掛合って立派な離縁を取って早速新屋の息子へ嫁に遣ろうという手筈だ、何卒一とつ骨を折っておくれ、旨く行けばお礼も沢山するよ、私たちは明日にも煤が谷へ帰って和女の返事を待っているからきっと手証を見届けておくれ」と大層込み入ったる風変わりの頼み、狸々芸者も驚きて思案に窮せり「奥さん、外の事ならどんなお頼みでも引受ますがそのお役目は私の柄にありませんネー」(酒277)

年配の女性→親しい芸者

(40) 「わたしの育て方が悪かったから自業自得かな。そこで、あんたを見込んでたのみがある。あんたは、自分の欲を離れて、良心にしたがって行動する勇氣のある人だ。そこを見込んで折入ってたのみがある。臨終のときに、ぜひ立会ってもらいたい」

「それは……。私は訪問看護婦ですし、お子さまや、ご親類が大勢いらっしやるでしょう」

「いや、その親類が当てにならんのだ。たいしたことはない。一か

二か三か、わたしが言うから、聞いたとおりに弁護士に言ってほしい。  
お礼はする」

「お礼なんかいただけません。そんな縁起でもないことを考えずに、  
毎日を楽しく暮らしましょう」(老人184-185)

**患者(年配の女性)→訪問看護婦**

上の用例から察せられるように、「してもらいたい」「しておくれ」の話し手は、親疎問わずに下位者と対等な人に対して使っている。話し手は殆ど男性である。「しておくれ」はやや古風な言い方である。しかしながら、柏崎(1993)の指摘したように、「しておくれ」は「お」の付くことによって、語気の強さを多少やわらげる働きを持っている<sup>18)</sup>ので、年配の女性や女将のような、なわばり意識における上位者も使っている。女性は男性より言葉遣いが丁寧だと常に言われている<sup>19)</sup>。ただし、女同士の上下関係がある場合、上位者のやや古風な言い回しになる。(39)の年配の女性が普段世話をしている親しい芸者に、(40)の年配の女性患者が定期的に自宅に通っている訪問看護婦に対する如き、わざと依頼性の強い「してもらいたい」「しておくれ」を選択するのは、その女性が相手に対して絶対の影響力を持っている信じながら、「何卒」「きつと」などの副詞、「見込む」「折入る」などの動詞と共に相手拒否できない、強い依頼性を表すと考えられる。また、

(41)「俺も、ニュースは今見たところや」

「ニュースはって？」

「説明すると長うなる。それより、ちょっと出られへんか」

「えっ」友彦は居間のほうを振り返った。「今すぐか」

「そうや」

「それはなんとかなると思うけど」

「ちょっと出てきてくれ。相談したいことがある。奈美江のことや」

「連絡があったのか」友彦は受話器を握りしめた。

「今、横におる」

「えっ、どうして？」

「せやから説明は後や。とにかくすぐに来てくれ。というても事務所

のほうやない。ホテルや」桐原は、そのホテル名と部屋番号をいった。  
(白夜330)

**店長→店員 (男性同士)**

(41) のように、「相談したいことがある」は依頼の形式に属するが、文脈によりその前の「ちょっと出てきてくれ」の理由説明になる。そして、「とにかくすぐに来てくれ」は副詞の変化（「ちょっと」から「とにかく」まで）によってひとまとまりの依頼表現の締めくくりの機能が見られる。他には、3つの部分を合わせてひとまとまりの依頼の表出を完成する例も見られる。

(42) 「すみません、奥さん。今、下に休業の貼り紙出すついでに、オーナーの家に行って直談判して来ます。ちょっと番して貰っていいですか」  
敏子は驚いて、腰を浮かせかけた。

「えっ、あたしが番をするの。お客さんが来たらどうしたらいいの」  
男は両手で敏子の肩を押さえる真似をした。

「何もしなくていいんですよ。ただ、予約の電話がかかってくたら、満室だと断ってくればいいんです。あと、ドリンクの業者が来るんで、納品書を貰ってください。それだけでいいですから。奥さんは何もしなくていいです。フロントに入ってください。万が一、客が上がって来たら、今日は満室だと断ってくれますか。すみません、小一時間お願いします。オーナーの家は砂川町なんて、すぐ戻ります」  
敏子が止める暇もなく、男は拝むようにして身を屈め、飛び出して行った。(魂-上321-322)

**ホテルの男性従業員→女性客**

(42) はホテルの男性従業員がいきなり泊まっている年上の女性客にフロント係の代行を頼んでいる。まったく親しくない相手なので、話し手指向の婉曲的依頼文から始まり、続いて話し手のなわばり意識の作用に基づいて聞き手指向の命令的依頼文になり、また疑問的依頼文を用いて、最後に話し手指向の要望的依頼文を以って依頼の表出を終える。更に他の用例を見てみる。

(43) 「なんだ、まだ毛が生えてるじゃねえか。さっさと丸めねえと、おれが安全カミソリでスキンヘッドにするぞ」窓の縁に足を乗せ、スリッ

パのまま外に出てきた。部屋の中にはもう一人、仲間の中学生がいた。細い目をしたその男も、窓を飛び越えカツに続く。

「坊主にしたら、全部なかったことにしてくれますか」硬直した体で二郎が言った。声がうわずっている。

「あ？なんの寝言だ。坊主はスタートラインだ。そこから話は始まるってことだぞ」黒木の数倍も鋭利な声だ。剣のように空気を切り裂き、二郎の耳に突き刺さってくる。(サウス-上127)

**男子小学生→不良の男子中学生**

(44) 「昨日、刑事が来たでしょう。その同じ用事で来たんです」

「刑事は仕事で来るんだけど、あなたは私用でしょう。どうして、僕があなたに答える義務があるのかなあ」

「僕が容疑者の一人となっているから、と言ったら同情して話してくれますか」

坂出は何も言わずに笑いだした。さんざん笑った後に、「そう言えば、形相が変わってるね」と言ったが、村野は何も言わずに坂出を見つめていた。(灰229)

**三十代の男性→有名なデザイナー**

(43) の「坊主にしたら」はまだ発生していない未来のことであるが、(44) の「言ったら」の内容は既に完了したことで、「言ったら」といった発話時点から話し手の「言う」こと自体も完了している。しかし、意味・機能から見れば、(43) (44) の「たら」節の情報はすべて話し手のなわばり<sup>20</sup>に属する。このように、「たら」節の情報が聞き手の分からない中立の領域や話し手の私的領域に属するので、「してくれますか」と共起する。これに対して、

(45) 「お手伝いできることがあったら、何でも言ってください。食糧のことでも、生活用品のことでも……」

「せっかくだが施しは受けん」父が言った。

「そんな、遠慮なさらなくても」

「遠慮じゃない」(サウス-下153)

**守る会の人たち→初対面の男性**

(46) 家を出るとき、確かに検事は言った。

「朝の食事がまだでしたら、どうぞゆっくりとやってください。われわれはお待ちしていますから」

その必要がない、と言ったのは結城のほうだった。(波-下230)

**検事→男性**

(45) の「お手伝いできることがある」かどうかは、聞き手が最も分かるはずで、(46) の「朝の食事がまだ」かどうかも、聞き手しか分からないことである。「たら」節の情報は、いずれも聞き手の私的領域<sup>21</sup>に属するのである。話し手は聞き手の私的領域に属することを言及して、聞き手に対する最大の利益を提供しようとする示している。更に「してください」と共起すれば、(37) と同じ丁寧さを増加する効果がある。他方、

(47) 「先生、いちばん高い地点に行ったら、反動をつけずにそのまま落下してください。前に手を伸ばせばキャッチャーがつかんでくれます」「うん、わかった」あっさり言った。(空中32)

**サーカスの男性演技者→男性精神科医**

(47) のように、「たら」節の情報は (45) (46) の仮定的用法と違って、話し手に教えられた「事実的条件」である。しかも、「いちばん高い地点に行ったら、反動をつけずにそのまま落下する」のは、話し手のなわばりに基づく発話で、聞き手に怪我をさせないためにもなる。話し手は聞き手に空中ブランコの技を教えるので、「してください」により指示や助言の意味が感じられる。

また、依頼の難度に従い、依頼の形式が徐々に増えていって、(1) (2) の下線部のように、要望的依頼文による「予告」や「強調」の機能も見られる。予告の機能には、まず (1) の「お願いがあるのだ」のように、「お願い」という依頼名詞の客観性と「のだ」の説明機能により、後に続いた具体的な依頼行為を予告する。「お願いしたいことがあるんですけど」もよく見られる形式である。次に、(2) の「一つ協力してほしいが」の如き、数詞の「一つ」という軽減化の手段<sup>22</sup>を以って話し手の控え目な気持ちを表しながら、「してほしい」による具体的な依頼内容を述べ、「が」の「臚化」<sup>23</sup>機能を用

いて語気を和らげるようになる。他に「お話をしたいのですが」も「予告」の機能がある。これに対して、依頼動詞「お願いする」「頼む」と依頼名詞「お願い」は、依頼性を減少するための「ちょっと」「少し」「ひとつ」、「お願いがあるのだ」のような形式につく「が」「けど」などとは共起しないで、依頼性を増加する副詞「どうぞ」「どうか」や終助詞「よ」と共起すれば、話し手の依頼の気持ちが強調され、懇願の意味を表す。

## 六. まとめ

依頼表現のプロトタイプ的なシナリオを検討した。このシナリオによって依頼の諸形式を依頼の「切り出し」「表出」「締めくくり」に分けられる。最も依頼しやすい場合には依頼の表出だけで済むが、依頼しにくい場合には依頼の表出が切り出しや締めくくりと併用し、依頼性を増加する。また、話し手指向の依頼文を使うと、話し手の控え目な気持ちが感じられ、丁寧さが増えるのに対して、聞き手指向の依頼文を使うと、聞き手に話し手の強い依頼性を感じられ、指示・助言のような機能に変更する。そして、依頼文の配置によって依頼性が増減したり、元の機能が変わったりこともある。

今後も依頼表現における諸形式の機能を更に詳しく検討したい。

## 参考文献：

- 安達 太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版  
井出 祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 大修館  
上野田鶴子 (1983) 「命令と依頼」『講座 日本語の表現3 話しことばの表現』 筑摩書房  
柏崎 雅世 (1993) 『日本語における行為指示型表現の機能—「お～／～てください」「～てくれ」「～て」 およびその疑問・否定疑問形について—』 くろしお出版  
神尾 昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 大修館書店  
——— (1998) 「情報のなわ張り理論：基礎から最近の発展まで」『談

話と情報構造』研究社

- 工藤真由美 (1979) 「依頼表現の発達」『国語と国文学』56巻1号
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 小泉 保 (1990) 『言外の言語学—日本語語用論—』三省堂
- 国立国語研究所 (1960) 『国立国語研究所報告18 話しことばの文型 (I)  
—対話資料による研究—』秀英出版
- (2004増補改訂版) 『分類語彙表—増補改訂版』大日本図書
- 鈴木 睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何  
にして成り立つか—」『日本語学』第8巻第2号 明治書院
- 仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 馬場俊臣・盧春蓮 (1992) 「日中依頼表現の比較対照」『北海道教育大学紀要』  
(第1部A) 第43巻第1号
- 前田 直子 (1995) 「バ、ト、ナラ、タラ」『日本語類義表現の文法 (下)』  
くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 森田 良行 (1996) 『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房
- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.  
坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』大修館書店
- Grice, P. (1989) *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press. 清  
塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』勁草書店
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What  
Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago  
Press. 池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・  
梅原大輔・大森文子・岡田禎之訳 (1993) 『認知意味論 言  
語から見た人間の心』紀伊国屋書店
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group  
Limited. 池上嘉彦・川上誓作訳 (1987) 『語用論』紀伊国屋  
書店
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: an Essay in the Philosophy of Language*.

用例出典と略記：

浅草卓弥『四日間奇蹟』宝島社(2004) = 「四日」／海月ルイ『子盗り』  
文藝春秋(2005) = 「盗り」／江川晴『老人病棟 訪問看護婦物語』小学館(1991) = 「老人」／奥田英朗『イン・ザ・プール』文藝春秋(2006) = 「プール」、『サウスバウンド』(上)(下)角川書店(2007) = 「サウス」、  
『空中ブランコ』文藝春秋(2008) = 「空中」／桐野夏生『水の眠り 灰の夢』文藝春秋(1998) = 「灰」、『魂萌え』(上)新潮社(2006) = 「魂-上」  
／幸田文『台所のおと』講談社(1995) = 「おと」／佐野洋『盗まれた影』集英社(1980) = 「影」／夏樹静子『蒸発』角川書店(1977) = 「蒸発」  
／仁木悦子『三日間の悪夢』角川書店(1980) = 「三日」、『赤い猫』講談社(1984) = 「猫」／西村京太郎『華麗なる誘拐』徳間書店(1982) = 「誘拐」  
／東野圭吾『白夜行』集英社(2002) = 「白夜」／藤田宜永『愛の領分』文藝春秋(2001) = 「愛」／松本清張『張込み』新潮社(1965) = 「張込み」、  
『砂の器』(下)新潮社(1973) = 「砂-下」、『波の塔』(上)(下)文藝春秋(1974) = 「波」、  
『渡された場面』新潮社(1981) = 「場面」／宮部みゆき『魔術はささやく』新潮社(1993) = 「魔術」、  
『我らが隣人の犯罪』(1993) = 「隣人」、  
『模倣犯』(上)(下)小学館(2001) = 「模倣」／村井弦斎『酒道楽』岩波書店(2006) = 「酒」  
／森純『八月の獲物』文藝春秋(1996) = 「獲物」／山崎豊子『白い巨塔』(二)(三)新潮社(2002) = 「巨塔2」「巨塔3」  
／横山秀夫『陰の季節』文藝春秋(2001) = 「陰」、  
『動機』文藝春秋(2002) = 「動機」

注：

- 1 Austin (1962, 日本語訳1978) は、このような動詞を「遂行動詞」(performative verb) と呼んでいる。本稿では国立国語研究所(2004増



補改訂版：303)の「請求・依頼」の項目を参考し、「依頼動詞」と呼ぶことにする。

- 2 「求める」「依頼する」「要請する」「要求する」「懇願する」「哀願する」などの依頼動詞は、主に平叙文として使われている。
- 3 下線部における話し手対聞き手である。
- 4 上野（1983：45-53）
- 5 益岡・田窪（1989：107-108）
- 6 小泉（1990：261-267）
- 7 柏崎（1993：76）は、用例が少ないという理由で「してくれ」が「勧め機能をあまり持たないということが言える」と指摘している。
- 8 これはLakoff（1987, 日本語訳1993:69）の用語である。仁田（1991：149）、安達（1999：52）は「傾き」という用語を使っている。また、「してちょうだい」について、工藤（1979）は「田中章夫『現代語助動詞の史的研究』（明治書院）近代に入ってから盛んになった女性語である」と指摘しているが、地域によって男性も使うようである。
- 9 本稿での「なわばり意識」は神尾（1998:30-31）の「情報のなわ張り理論」をふまえて、依頼表現において話し手の依頼内容が話し手と聞き手、どちらのなわばりに属するかによって派生された意識を指す。
- 10 ここでは、便宜上に相手に対する依頼の働きかけ性を「依頼性」と呼ぶことにする。
- 11 これは、山岡（2008：7）の命令に対する定義である。
- 12 ここでは、「してくれる」系と「してもらえる」系の疑問形だけを指す。一般の疑問文や動詞の可能形による疑問文など依頼表現に関わる疑問文を「婉曲的依頼文」の範疇に入れることにする。
- 13 Lakoff（1987, 日本語訳1993：79）
- 14 Lakoff（前掲：487）
- 15 Hは聞き手、Sは話し手、Aは話し手が聞き手に依頼する行為である。
- 16 語用論的前提とは、話し手がSを述べる際に常にPという想定に立って述べているならば、Pは文Sの前提である。Lakoff（前掲：161）

17 例：たった十メートルほど先の、小峰課長の席が遠く感じられた。

「よろしくお願ひします」

軽く一礼して、植村は指定日時を記した用紙を出した。(半落ち243)

男性弁護士→警察官

のように依頼の意味が薄れて挨拶表現として使われている。

18 柏崎 (1993: 73)

19 井出 (2006: 166-174)

20 話し手のなわばりの範囲は、神尾 (1998: 30-31) の「情報のなわ張り理論」に入る条件による。

21 鈴木 (1989) によると、聞き手の私的領域とは、「聞き手の欲求・願望・意志・感情・感覚など、個人のアイデンティティに深く関わる領域」ということである。

22 馬場・盧 (1992)

23 森田 (1996: 56-57)